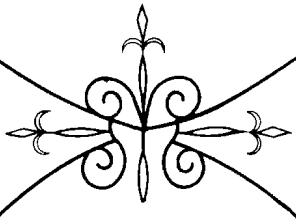
三島由紀夫全集



22

戯　曲
Ⅲ

監修／石川淳　川端康成　中村光夫　武田泰淳
編纂／佐伯彰一　ドナルド・キーン　村松剛　田中美代子

新　潮　社

本文印刷　株式会社精興社
口絵印刷　松本精喜堂印刷株式会社
付録印刷　株式会社精興社
口絵製版　株式会社学術写真製版所
製　本　大口製本印刷株式会社
製　函　日本紙パルプ商事株式会社
本文用紙　特漉上質紙・三菱製紙株式会社
皮　革　籾井皮革株式会社
表紙用紙　手漉局紙キラ引・株式会社山田商会
扉用紙　ゴールデンアロー・特種製紙株式会社
見返用紙　しぶ茶堅紙・特種製紙株式会社
函用紙　Sベラン絹目・特種製紙株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします

三島由紀夫全集　第二十二巻　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

朝の躑躅……七
薔薇と海賊……四一
むすめごのみ帯取池……一三七
熊野……一六一
女は占領されない……一八一
熱帯樹……二七九
弱法師……三六五
十日の菊……三八九
黒蜥蜴……四七七
解題……五八三
校訂……五九一

三島由紀夫全集　第二十二巻　戯曲（3）

朝の躑躅

時

昭和二年四月二十一日午前二時すぎより朝にいたる

所

草門子爵邸内

人

草門子爵夫人綾子
小寺勝造
郡司男爵未亡人繁子
鹿子木正高
家令山口
阪内伯爵
同夫人
桑原男爵
勝本子爵
勝本夫人
パーティの客大ぜい
他女中など

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一場

（草門家の洋間。巨大な七寶の花瓶に八重櫻が活けてある。マンテルピースに巨大な大理石の置時計。夜中の二時すぎ。幕あくと、郡司男爵未亡人繁子と小寺勝造が、レコードの音樂でチャールストン・ダンスを踊つてをり、客一同これを圍んで見てゐる。ダンスをはる。皆々「繁子様、本當にお上手」「よくお憶えになつたのね、繁子様」「チャールストンつて面白いこと」「繁子様、勇敢でいらつしやるわ」など、口々に繁子をほめたたへ、勝造を無視する。踊りの二人は舞臺端の椅子に休む。女中が飲物をはこぶ。又別の音樂がかけられ、二三組が踊りだす。――繁子は斷髪に洋裝。勝造は最新流行の服を着てゐる）

小寺　ごらんなさい。誰一人私の名を口にしない。ほめるのはあなたばかり。それといふのも、この中で私一人は別の社會の人間だからだ。

繁子　氣になさることはないわ。私のはうではあんな連中を無視してゐてよ。

小寺　あなたは無視する資格をもつてゐるし、私はもつてゐない。あなたは郡司男爵の未亡人だ

し、私は、……私はといへば成上り者なんだから。

繁子　小寺汽船の社長さん、アジヤ・ゴムの社長さんのあなたがねえ。社長室ではふんぞり返つてゐるあなたが、ここへ來ると可愛らしいこと！

小寺　誰でも場ちがひの場所では可愛らしくなりますよ。

繁子　そんならこんなところへいらつしやらなければよかつたのに。

小寺　誘つて下すつたのはどなたです。

繁子　あらいやだ、私のせゐにして。……わかつてゐてよ、ちやんと。

小寺　え？

繁子　わかつてゐてよ。あなたはかねがね、ここの奥様に……

（勝造ギクリとなすとき、音樂をはりて、皆々老人客のダンスに拍手し、ざわめく。勝造そのざわめきに入らんとして立上るに、繁子ははげしく引止め、醉ひに勢ひをかりた大聲で喋りはじめる。一同、私語しつつ、これをきく）

お待ちなさいよ。ここの綾子様が子爵夫人なら、私だつて男爵夫人だわ。華族の女がお好きなら、えりごのみをなさることはないぢやないの。そりやあ綾子さんはおきれいだし、昔風で、お上品で、繪から拔け出たやうな方ですわ。あんなお澄ましの眞似は私にはできませんが、それでも私は民衆の味方なのよ。斷髪にして、洋服を着て、チャールストンを踊つて、自動車を運轉して、……それが何が惡いの。（今度は客全部に八つ當りをして）何が惡いの。小寺さん、あなたは矛盾の塊なんだわ。斷髪をして、洋服を着て、チャールストンを踊る、それを（客一同の顔を見渡し）舊弊な方々がいろいろ陰口のたねになさる。その舊弊な方々から差別待遇をさ

れてゐるあなたが、小寺さん、その方々の趣味におもねつて、一緒になつて私を莫迦にしてゐるんだわ。（ト泣く）

小寺　弱りましたなあ、皆さん、私は實際……

阪内伯爵　（アドルフ・マンジュウに似たお洒落な老紳士）好い加減になさるものですよ、郡司さん。（ト肩に手をかけて慰める）われわれが取り亂すのは、革命が起つてからだつておそくないんですよ。まあ私の生きてるうちは起るまいが……。

桑原男爵　繁子様は女闘士みたいなことを仰言いますね。

阪内伯爵夫人　さあ、お氣をお取り直しあそばして……

（女たち一同、繁子を介抱して、上手の部屋へ連れ去る。小寺一人、又もや取り殘される）

小寺　（時計を見て、呟くごとく）やあ、もう二時すぎだ。そろそろ失禮しなくちやあ……（かたはらの青年、鹿子木正高に）……お姉様に御挨拶をして行きたいのですが……

鹿子木　（二十歳位。眉目清秀。女主人綾子の實弟）いいぢやありませんか。どうせ年に何回の夜明かしのパーティーですもの。どうかごゆつくり。

小寺　いいえね。私は餘計者ですからな。

鹿子木　そんなことを仰言つちやいけませんよ。僕もかういふ氣取り屋の連中は大きらひなんです。爵位だの、家代々の財産だのにしがみついて、一生貴族院のカビくさい椅子に坐つたり立つたりしてくらすのが何が偉い。少くとも僕はまつぴらです。僕は、正直云つて、さつきからこの連中の、あなたに對する冷たい失敬な態度に、腹が立つてたまらないんです。何も二十年前のあなたが、繁子夫人のお家の門番だつたからと云つて、何も……

小寺　ああ、それを仰言らないで下さい。

鹿子木　僕は繁子様の態度にも腹を立ててゐるんです。僕は、あなたを尊敬してゐますよ、小寺さん。この中ではおそらく僕一人が……

小寺　さう言つて下さると、穴があつたら入りたいやうで。……いやね、私も一代で産を成して、世間へ出れば誰にもひけはとりませんが、華族さんと云ふと、もういけないんです。もう、何かかう頭から……

鹿子木　繁子様もいけませんね。そこへ行くと……

小寺　そこへ行くと、……あなたのお姉様なぞは……

鹿子木　ええ、あれは貴婦人です。最後の貴婦人です。殘んの櫻、夕映えの中の櫻です。僕は姉を尊敬してゐるんですよ。あなたを尊敬するのと別な意味で。

（下手から和服の綾子があらはれる）

綾子　まあごめんあそばせ。中座いたしまして。主人はいつもああでございますの、一寸いただくともう……

（上手から、繁子をのぞいて女たちがかへつてくる）

阪内夫人　もうぐつすりおやすみになつた……

綾子　ええ、ここで寢まれたら、お客様にも惡うございますし、風邪でも引きましたら……

阪内夫人　子守唄をうたつてお上げになつたのね。

綾子　（微笑して）それはもう……

鹿子木　綾様、小寺さんがおかへりになると仰言るんですよ。お引止めになつて下さい。

綾子　今夜は夜明かしのお約束ぢやございませんか。おかへりあそばしては何にもなりませんわ。

小寺　……はあ。（トまたたきもせず綾子をみつめる）

桑原　ねえ、奥様、阪内伯爵はアドルフ・マンジュウに似ていらつしやるつて、さつきから評判なんですよ。

綾子　アドルフ・マンジュウつて何でございますの。

阪内夫人　今はやりの活動寫眞の役者でございますわ。「不良老年」といふの御覽にならない？

阪内　綾子さんは活動寫眞なんぞ御覽にならんのだ。なあ、（トじつと綾子を見て）あなたは賑やかな場所がお好きなやうには見えないなあ。こんなパーティーだつて、本當はお好きぢやないのでせう。

綾子　まあ……そんな……

阪内　わかつとる。わかつとる。すべては御主人公の御趣味なんだ。人集めがお好きで、賑やかなことがお好きで、浪費がお好きで、さびしがりやで、そのくせ、御自分はすぐ酔つぱらつて寢ておしまひになる。だからわれわれは御主人に招かれてここへやつて來るが、その實奥様、われわれの本當の目的と云ふか魅力と云ふか、それは人集めのおきらひなあなたに惹かされて參上するんですよ。

桑原　伯爵はすぐ本當のことを仰言るからイヤになる。こんな大人しい方をいぢめてどうなさるおつもりなんです。

阪内　今夜はお一人のときにうんといぢめて、本音を吐かして差上げますよ。

鹿子木　お姉様は嘘をつきませんよ。

小寺　さうですとも。奥様は決して嘘をおつきになる方ぢやありません。

（一同ザワ〳〵となる。綾子、終始微笑を含みつつ、一同を制して中央の椅子に坐る）

綾子　それでは白狀いたしますわ。私、本當のことを申しますと、子供もなくつて、こんながらんどうな大きな屋敷に住むのは好きぢやございません。皆様においでいただくのは嬉しうございますが、私はこの通り世間しらずで、面白いお話一つ出來ませんもの、さぞお退屈だらうと存じますわ。

小寺　退屈なんて、そんな、とんでもない……

（一同、シッと制止するやうに小寺を見る。綾子微笑して）

綾子　さう仰言つていただくと嬉しうございますが、でもこんな暮しは、みんな主人のためなのでございますの。主人は御承知のとほり、子供のやうな人でございます。私以上に世間しらずで、私以上にかよわく、何も世間並のお仕事はできません。毎日の贅澤、氣散じ、氣ままな買物、それだけが主人の生甲斐。それも生れつきお金といふものを自分の手に持つたことのない人で、物の値段もわかりません。私がお供いたさなければ、主人は波止場へでも行つて、外國の軍艦が氣に入りでもしましたら、値もきかずにその場で買つてまゐるかもしれません。いつかも銀座のカフェーの看板がほしくて、とんだ言ひ値で買つて來るところでございました。……あんな心のきれいな、子供のままの、まあ神様のやうな人はをりません。

阪内　あなたは本當に御主人を愛しておいでだ。

綾子　愛してゐる、多分さうなのでございませうね。あの人は熱帶魚のやうに、贅澤な硝子（ガラス）の水槽のなかで、美しい藻にかこまれて、晝も夜も同じ溫度でなくては生きてゆけないのでござい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com